

【世紀末のウィーンに流れた音楽】

ドビュッシー＝ラヴェル：牧神の午後への前奏曲

「牧神の午後への前奏曲」は、ドビュッシーが1892～94年にかけて作曲した管弦楽作品。国民音楽協会で初演され、その才能を世に知らしめることとなった。ドビュッシーが敬愛した19世紀フランスの詩人ステファヌ・マラルメの象徴詩『牧神の午後』（『半獣神の午後』）からインスピレーションを得ており、午睡から覚めたばかりの気だるい午後、牧神の官能的な夢を、印象主義的な筆致で描いている。本日は、ラヴェルによりピアノ連弾用に編曲されたバージョンでお届けする。

J. シュトラウス 2世：美しき青きドナウ

「ワルツ王」J. シュトラウス 2世が、1867年に作曲した合唱用ワルツ。「三大ワルツ」の一つに数えられ、人気も高い。序奏、第1ワルツ（二部形式）、第2ワルツ（三部形式）、第3ワルツ（二部形式）、短い経過句ののち第4ワルツ（二部形式）、経過部ののち第5ワルツ（二部形式）、そして後奏という構成になっており、これぞウィンナ・ワルツと言える洗練された旋律の数々を堪能できる。

ブラームス：16のワルツ

ブラームスらしからぬ、とも言えるほど明るくさりげないワルツの小品集で、1865年、ピアノ連弾用に作曲された。全16曲からなり、ほとんどは短いレントラー舞曲風の流麗なワルツである。ただ、第11曲・第14曲はジプシー風の曲調。第15曲は、全曲中最も有名で、誰しも聞き覚えがあるだろう。最後を飾る第16曲には二重対位法が用いられ、手堅く全曲を締めくくる。

レーガー：6つのワルツ

マックス・レーガーは、オルガン作品によってその名を知られているが、オペラと交響曲を除くほぼすべてのジャンルに作品を残し、作曲家としては多産だった。1896年、23歳の時に徴兵され、1898年に除隊。この《6つのワルツ》はその1898年、4手ピアノ用に書かれた。各曲は1～2分前後と短いものの、レーガーならではの書法を示しており、最後は華々しいクライマックスを築いて全曲を締めくくる。

ドビュッシー（A. ベンフェルト編）：神聖な舞曲と世俗的な舞曲

1904年、ハープと弦楽オーケストラのために作曲された。この作品が生まれた背景には、楽器の製作会社であるエラールとプレイエルによるハープの開発競争があり、ドビュッシーはプレイエルが開発したクロマティック・ハープの

ために本作を書いた。2部（緩／急）からなり、続けて演奏される。どちらも3拍子だが、神秘的な雰囲気をもたらす「神聖な舞曲」に対し、「世俗的な舞曲」はどこか物憂げな感じがする。